



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                     |                                                                                                         |
|---------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title               | 社会理論から見るメディアと権力：白虹事件とロッキード事件を事例として〔論文内容及び審査の要旨〕                                                         |
| Author(s)           | 朱，迪                                                                                                     |
| Degree Grantor      | 北海道大学                                                                                                   |
| Degree Name         | 博士(学術)                                                                                                  |
| Dissertation Number | 甲第16321号                                                                                                |
| Issue Date          | 2025-03-25                                                                                              |
| Doc URL             | <a href="https://hdl.handle.net/2115/95251">https://hdl.handle.net/2115/95251</a>                       |
| Rights(URL)         | <a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a> |
| Type                | doctoral thesis                                                                                         |
| File Information    | ZHU_Di_review.pdf, 審査の要旨                                                                                |



## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 朱 迪

|      |    |      |   |   |    |
|------|----|------|---|---|----|
| 審査委員 | 主査 | 教授   | 金 | 山 | 準  |
|      | 副査 | 教授   | 齋 | 藤 | 拓也 |
|      | 副査 | 特任教授 | 鈴 | 木 | 純一 |

## 学位論文題名

社会理論から見るメディアと権力

——白虹事件とロッキード事件を事例として

本研究の目的は、従来の「メディアと権力」研究における概念的な曖昧さを取り除き、より客観的、より普遍的な分析フレームを構築し、その有効性を検証することにあるとされる。この目的を、どの程度達成できているかが、本論文の評価の中心となるが、その際、二つの観点がとりわけ重要であると考えられる。一つは、理論的な側面で、信頼性のある社会理論が精確に理解されかつ対象領域に適合する形で提示されているか、それに基づいて様々な事例に適用でき、時代的変遷にも対応する分析フレームとなっているか、という点である。もう一つは、実証的な側面で、そのフレームを用いた事例研究が的確に行われているか、時代的にも主題的にも異なる事例の比較において、本研究が提示する分析方法を用いることで有効な結論が導き出されているか、という点である。

前者に関して言えば、本論文の依拠するルーマンの社会理論の理解と分析装置としての整備が中心課題となる。独自の概念規定と理論操作によって現代社会を新たな視点から分析することで知られているルーマンの社会システム理論であるが、審査委員会では、「権力コミュニケーション」、「権力資源」、「(マス) メディアの二つのリアリティ」、「情報・伝達・理解の選択構造としてのコミュニケーション」、「二重の偶発性」等のルーマン理論に関する本論文の理解は精度の高い水準に達し、それに基づいた分析フレームの設定も十分に有効性のある形で行われている、と評価された。後者に関して言えば、本論文で示された二つの事例研究は、選択としての的確であり、時代的社会的状況の変化の比較検証としても有効であると認められた。また、

その具体的な分析結果も的確なもので、白虹事件における大阪朝日新聞の対応の理由や、ロッキード事件においてのメディアが構築する社会的リアリティの機能の説明等、説得力があるものとして評価された。

口頭試問は2025年1月17日14時45分から16時15分まで、学院105教室において行われた。冒頭、執筆者による論文趣旨・内容の説明が30分ほどなされ、その後質疑応答に移った。様々な観点からの質問が出され、それに対する執筆者からの回答・説明があったがそのうちの主なものを挙げておく。まず本論文で、言及されているが結局は採用されることがなかった「市民社会論」はどのような文脈から出てきてどのように規定されているのかという質問があった。これに対して執筆者は「社会的な事柄に対して（メディアと）コミュニケーションによって合意形成＝自己決定する人々」というハーバマスの文脈の「市民社会論」を想定しているが、規範性の要素が強く、客観的な記述性とは相容れないという理由から採用しなかったことを説明した。また、この研究における「権力」は政治的な権力に限られるのか、あるいは経済等を含めた広い意味における権力を想定しているのか、という質問がなされた。これに対しては、ルーマンのシステム理論は政治システムと経済システムそれぞれの自律性を前提としており、この論文の文脈でも政治システムが前提となっているとの説明があった。さらには、本論文は、メディア論という観点に加えてルーマン論という側面もあるが、後者における新奇性、オリジナリティはどこにあるのかという質問がなされた。これに対して執筆者は、ルーマンの社会理論に関しては、この論文においてはまず精確に応用することのみを考えており、新たな展開は今後の課題としたいとの回答があった。他にも「新自由主義」という概念の妥当性、「メディア・公権力・オーディエンス」三角関係構図における先行研究との違い、分析装置の「客観性」「普遍性」ないし「価値自由」ということばの実質性、事例の時代的な違いの選択理由等の質問がなされたが、いずれに対しても執筆者からは的確かつ誠実な回答があり、基本的に論旨と矛盾したり決定的な瑕疵となる要素はなかった。

以上の全体的な評価及び口頭試問の経緯を、審査委員会で慎重に討議した結果、全委員一致で、本論文は本学院博士（学術）の学位授与に値する十分な水準にあり、問題なく「合格」であると判断した。